

ライフ  
ストーリー

渡邊・プロスペル 礼さん

(2013年3月人間福祉学部人間科学科卒業)

セクシュアリティを「獲得」するまでの  
道のりとフランスでの同性婚生活

## 1. はじめに

みなさん、初めましてこんにちは。人間福祉学部人間科学科 2013 年卒業の渡邊・プロスペル 礼です。

在学中、関西学院ゴスペルクワイア“Power Of Voice(POV)”に属しアルトのパートリーダーを務めました。就活を全くせず、関学を卒業後、イギリスにある Cambridge School of Visual Performing Arts (CSVPA) と、East 15 (イースト フィフティーン) というドラマスクールで演劇を学びました。East 15 で妻と出会い、フランスで結婚をしました。現在フランスに住んでいます。

「性的指向は、好きになる条件に相手の性自認は関係ないパンセクシュアル、性自認は、意図的に自分の性自認を決めないクエスチョニングです。」と自分の SOGI (Sexual Orientation <性的指向> and Gender Identity <性自認>:ソジあるいはソギと読みます)を言葉で表現できるようになったのも、ここ数年の話です。

このエッセイでは、自分のセクシュアリティを「獲得」するまでの道のりと、同性婚が合法的なフランスで生活をして日々感じていることをお伝えしようと思います。

## 2. 自分のセクシュアリティを「獲得」するまでの道のり

小さい頃から自分は好きになる子の性に区別がない、いわゆるパンセクシュアルという概念は持っていました。しかしそれに当てはまる言葉は知りませんでした。幼稚園では「女の子は男の子を好きになるんだよ」と教えられ、「じゃあ女の子の私は男の子を好きになるか」と思い、それに自然に従っていました。やがて好きな男の子ができて周りの子ときゃっきゃっとはしゃいでいました。

小学生の時、ある女の子を好きになりました。他の友達とは違う“好き”で、ハグしたいくらい。けれども周りの「女の子は男の子を好きになるものだ！」のプレッシャーが強くて、「この好きは親友として、好きが大きい

すぎるだけなんだ」と自分で納得するしかありませんでした。

高学年ごろから、女子は女子と一緒にいなくちゃいけないような雰囲気があって、それが嫌で男子と遊んだら「男好きなんだね」と言われました。私はただ友達と遊んでいただけなのに。中学では制服があつたり授業も男女別々だったり、より男女の違いを感じさせられるようになりましたが、自分にはただただ違和感しかありませんでした。高校は演劇科に進学。ここでは自分らしくのびのびとできました。39人のクラスメートが一人の男子以外全員女子だったからか、その39人がそれぞれ個性豊かだったからか、わからないのですけれど。

関学に入学し、友人や部活（POV）のメンバーに恵まれ、ここでも自分らしくのびのびとできました。

2回生のとき、武田丈先生の人間多様性論の授業に出会いました。セクシュアルマイノリティの回のゲストスピーカーは、レズビアンであることを公表している方でした。衝撃でした。「自分のセクシュアルオリエンテーションをこうも堂々と口に出してもいいんや！ それでこの社会で生きられるんや」と。

この授業をきっかけに自分のセクシュアルオリエンテーションについて考え始めました。それまで付き合ったのは男性だけだったし、それに違和感はなかったから、まだその頃は自分のことをストレートだと思っていたけれど、今までの経験からこれから女子と付き合う可能性はないとは言い切れなかったように思います。そこから「これから女子と付き合うことになったら、その時自分のセクシュアリティについて見直してみよう。それまではとりあえずストレートや」という考えに行き着きました。

今から思えば、大学在学中は自分がセクシュアルマイノリティだと他者に言うことは怖かったから、そしてそれは自分の中でも自分自身がちゃんと分かっていないことから来ている怖さだったから、その結論に至ったのでしょう。

卒業後、俳優になるため留学をした英国で自分のセクシュアリティと向き合う時がやってきました。

最初の留学先のCSVPAでステキな女の子に出会ったのです。入学当初か

ら自分はレズビアンだと公言して自分らしく生きている彼女に自然と惹かれていきました。お付き合いまでには行かなかったけど、彼女のおかげで自分のセクシュアルオリエンテーションをより掘り下げて考えることができました。同時に新しい疑問も生じました。「男の子のことも好きだし、女の子のことも好きだ、ということは、私はバイセクシュアルなのか？」

このバイセクシュアルという単語は 100% スッキリしない単語でした。「ストーンとこないけど、ストレートではないし、レズビアンではないし…ほな、バイセクシュアルなのかな」と、当時の自分が知っている知識から納得できた単語だったのです。

バイセクシュアルであることを自覚してからは、留学中の色々な国籍の友達にはそのまま「私はバイセクシュアルやねん！」と言えました。初めて会う人にもすんなり言えました。なぜなら自分を表す言葉を見つけられたからです。

日本の家族では、まず妹にすぐにスカイプで話しました。妹とはとても仲が良かったので、言わないという選択はありませんでした。「きっと驚くやろうな」との予想に反し、反応は「やと思ってた」。訳を聞くと「だっでずっと、私みたいな恋人欲しくて言うてたからそうかなーって」。緊張しまくっていたので、正直ずっこけた一幕でした。

妹にカミングアウトした時、不安だったのは彼女に重荷になるんじゃないかということでした。姉がバイセクシュアルだと周りの人間が知ったときの彼らの反応に、妹が傷つくんじゃないかと。しかし妹はこう言いました。「そこで私のことを傷つけたり、離れて行ったりするような友達や彼氏やったら、それまでの関係だったってことだよ」と。この言葉にどれだけ私は救われたことか。

母には CSVPA を卒業し、イギリスから帰国後に伝えました。2人で飲みに行く機会があって、イギリスの土産話をした時に「お母さん、私バイやねん」と。母は泣いて喜んでいました。「良かったー」と。何に対して良かったのかは分からないけど、きっと私が母に言えたから喜んでたのかな？ 母は言いやすい存在でした。元々母の教え子に当事者がいたこと

で、LGBTQ+の本を読んでいたたり、大学生のLGBTQ+のサークルのイベントなどに参加したりして、知識を持っていたからです。

けれどもその日、私はこんなことも母に言いました。「結婚するなら男の人やわー。だって子ども欲しいもん」。母は即答で「そんなことないで！ いろんな家族の形あるねんから」と言って、次の日たくさんのLGBTQ+の本を貸してくれました。そのおかげで、自分のセクシュアルオリエンテーションを尊重した私の結婚の視野が広がったと感謝しています。

日本に帰国中、親しい友達には「私バイやねん」とカミングアウトしました。しなかった親しい友達もいました。その瞬間に言いたくなかったからなのか、言わなくてもよかったからなのか。その線引きは一体なんだったんだろうと今でも考えます。

ただ、家族の中で父だけにはカミングアウトがまだでした。父とはLGBTQ+のことを話したことがなかったので、どれだけ理解があるのか分からなかったし、そもそも言う必要もないと思っていました。だから「言わなくていいか」と思ったまま、言う機会もなく、2回目の渡英となりました。

East 15は、大学院だったこともあり前回のCSVPAよりも国際色豊かな学びの場でした。関学の時よりも様々なバックグラウンド、SOGIの人々に出会いました。そこで初めて「パンセクシュアル」という単語を知りました。ストーンと来ました。今まで私が感じていた感覚を初めて説明してくれる言葉でした。「そうやってん、私が好きになる人に性別は正直関係なくて、好きになった人がたまたま男性やったり女性やったりトランスジェンダーやっただけ」と気づいたのです。「異性にも同性にも」というように好きになる相手の性別に条件があるバイセクシュアルという言葉は、私のセクシュアルオリエンテーションを表してはいなかったのです。

パンセクシュアルという言葉で自分を表現することが、自分のセクシュアルオリエンテーションの「獲得」となりました。この時の気持ちを表現すると、3Gでは見られなかった動画を、WiFiを「獲得」したことにより、解像度が高くなって動画が見られるようになった感じです。“解像度”が高くなったおかげで、今の妻Coralie(コガリ)と、人生のパートナーと

して出会うことになります。

彼女は同じ学校の演出家コースに通うフランス人で、私と同年。付き合いはオープン、周りにも公認のカップルでした。

### 3. 同性婚が合法的なフランスで生活をして日々感じていること

Coralie とは付き合っただけでお互いの将来について話をしました。芸術的なセンスも生活的なセンスも合っていたので、将来一緒にいることが容易に想像できました。ふたりでヨーロッパに生活の拠点を置きたいのですが、EU のパスポートを持つ Coralie と異なり、私の日本のパスポートではできない相談でした。ただ、もしフランスのパートナーシップ制度、PACS（パックス）を Coralie と結べば、日本人の私でも、フランス人のパートナーとしてフランスに在住することが可能であることを知りました。PACS とは、成人に達した個人 2 人が安定した共同生活を営むために交わす契約で法的にサポートされており、2 人は異性でも同性でも問わないというものです。一も二もなく、そうすることを選びました。

PACS のことを家族に話す時、妹と母には言いやすかったものの、父には何と伝えれば良いか悩みました。母に相談し、私のセクシュアルオリエンテーションと、PACS でパートナーシップ契約を結ぶこと、そしてその相手が女性であることを手紙に書いて送り、後日、妹同席のもと、スカイプで改めて報告しました。父にはダブルショックだったことでしょう。娘のセクシュアルオリエンテーションを知ったこと、父の知らない相手と PACS を進めたこと。けれども父は「したいようにしなさい」と後押ししてくれました。

私自身が、妻との PACS を気持ちよく進めることができたのは父の言葉のおかげでした。娘をこのように送り出すことは、父の心の中を察すると容易なことではなかったでしょう。この時のスカイプを思い出すと今でも涙がでできます。それはきっと、やっと父に言えた<sup>あんど</sup>安堵と<sup>うれ</sup>嬉しさと、このような形で伝えたことの申し訳なさからでしょう。父にはこの時しっかりと私と向き合い、私の話を聞いてくれたことに心から感謝しています。

こうして、East 15 卒業後はフランスに移住し、自分達のシアターフィルムカンパニー、「桜の木の下 Sakura no Ki no Shita」で、日本とフランスの文化を基盤とし、女性に焦点を当てた芝居、映画を世に送り出す活動をしています。また Coreilie (Coralie と Rei の名前をミックス) というカップルモデルとしても活動しています。LGBTQ+ が芸術を通して世間でもっと認知されるように、間違った理解や知識で人々がジャッジしないように、そして小さい頃の私のように周りに正しい情報が無く、悩み苦しむ若者に対して「こんなカップルもこの世界において、普通に暮らしてるでー」ということをインスタグラムや YouTube で発信しています。

また、去年 (2018 年) の 12 月に結婚しました。日本で、ではありません。日本では、まだ同性婚は合法ではないのです。そのため、その年末年始に日本に帰国した際は、私と妻は「他人同士」でした。妻が自分の国で配偶者として認められない悲しさとその不条理・不合理さをかみしめました。つまり、日本滞在中に、もしお互いに急な手術などで配偶者としての緊急の判断が求められた時、異性婚カップルには認められている法的な立会人としての権利が認められないのです。またフランス人の妻を日本に配偶者ビザで呼び寄せることも、できないのです。異性婚カップルにはできることが、です。だから今のところ、日本で同性婚が法的に制定されるまで、私達は日本で暮らすことは難しいのです。結婚はフランスでは嬉しいことだったのに、とやりきれない思いでいっぱいです。

と言っても同性婚が認められているフランスでもすべてのことが快適に運ぶわけではありません。例えば、公共料金を払う際、請求書を妻と連名にし、もちろんどちらも Madame (マダム：既婚女性に使う) を敬称に付けてもらうように依頼したことがありました。しかし後日届いた請求書には私の名前が Monsieur (ムシュー：男性に使う) Rei WATANABE となっていたのです。予めこちらから説明していたのにも関わらずです。担当者の「これが当たり前」を押し付けられたようで、「怒り心頭に発する」という日本語を久しぶりに思い出しました。

事前に説明していない場合に憶測で判断されることは、しょっちゅうある話です。私が最近傷ついた例なのですが、仲の良い友達に「礼、女性と

結婚したからレズビアンだと思ってたわ！」と言われたことがあります。私は一言も「私はレズビアンだ」と言ったことが無いのにも関わらず、その友人にとっては、私はレズビアンになっていました。では、なぜ「礼は女性と結婚した」だけでは、その子にとって私の最新情報は十分で無かったのだろうか。と同時にそれは「結婚が男女がするもの」が「当然」であると考えのと同様に、「女性が女性と結婚＝レズビアン」が世の中の「普通・当たり前」になっていることにも気づきました。このように本人に聞きもせず、その人のアイデンティティでもあるセクシュアルオリエンテーションを勝手に決めつけるのは、その気が無くても本人を傷つけることにもなります。この出来事より、「女性が女性と結婚＝レズビアン」以外のケースもあるんだよ、ということを当事者の私から世の中へ発信し続けたいといけな、と心に決めました。

#### 4. おわりに

この文章を読んでくださっているあなたへ。3つのことをお伝えします。

もし友達や家族があなたにカミングアウトした時、「LGBTQ+ だから」といって本人への対応を変える必要はありません。その人自身と今まで通りしっかりと向き合っていれば良いと思います。LGBTQ+ は少数だからといって特別ではないからです。

人間は知らないものに対して憶測で攻撃をします。それは自分が知らない対象、ものが怖いからです。ちゃんと正しい知識があれば怖くはありません。知らないのなら、調べる、話を聞く。憶測だけで人や物事を判断しないでおきましょう。それが目の前にいる人に敬意を払うことにもなります。

とにかく自分らしく生きてください。世の中、「こうじゃないとダメだ！」と決めつけられることが多いものですが、それに従う必要は無いと思います。自分のことは自分で決めたら良い。もし分からないなら分からないままで良いのです。



最後に私は、自分が小さい頃感じた不便さをこれからの子ども達に感じさせないように、自分が知りたいと思ったことがすぐに正しく知ることができるように、これからも私の方法で、社会に伝えて社会を変えていけるように発信を続けていきたいと思っています。

このエッセイを読んでもくださったあなたもね。

